

長崎大多文化社会学部に見る 大学の英語教育改革の今

企業・大学の国際競争力の強化、世界における日本の地位向上に向けて、現在、日本の大学はグローバル人材の育成に力を入れている。カリキュラムや学部改組、人材の確保など、あらゆる教育資産にメスを入れ、英語教育を急ピッチで変革させている大学は少なくない。教育改革と学部改革によって、実践的な英語力の育成を進める長崎大を例に、大学の英語教育改革の実情を見ていく。

英語力に加え、幅広い教養の習得を目指す

長崎大学長 片峰 茂



本学では、2012年度から、教養教育の抜本的な改革を進めており、中でも英語教育改革は重要な柱の1つと位置付けています。改革前に実施した学生アンケートでは、本学の英語教育に大きな不満を抱えていることが分かりました。「教員によって教え方やレベルに違いがありすぎる」というのが、その理由です。

本学には1学年に約1700人の学生がいま

実践的な英語スキルの 習得を目指す大学改革

◎かつての大学の英語教育は、読解や異文化理解など、リベラルアーツとしての学びが中心であり、実践的なスキルに即した授業は少なかった。中学・高校の英語教育も、ともすれば大学入試をゴールとした内容であり、実践的な英語スキルを習得するのは大学院進学後、あるいは就職後に必要に迫られて……といった状態だった。そうした英語教育の結果、グローバル化する社会の中で、日本人が存在感を発揮できなくなりつつある。高度成長期のように、日本人の勤勉さと学力の高さだけで世界から尊敬される時代は終わった。多様な社会において、多様な人たちと協働して、これまでにない価値を生み出していくためには、国際通用語としての英語力の習得は避けられなくなっている。実践の場で「使える英語」が求められており、全国の大学が様々な形で英語教育の改革を進めている。

特に、地方の国公立大には、地方創生を担う人材を育成し、地域に定着させるという使命もある。グローバルに活躍できる力を身に付けた人材を多く育てると同時に、地域に愛着を持って貢献する、高い志を持った人材を育てていくことも求められている。

すが、その全員の英語力をネイティブレベルに上げるのは容易ではありませんし、それは社会的なニーズにも合致していません。個人の意見では、英語力の全体的な底上げと、国際社会で活躍するグローバル人材の育成は、分けて考えた方がよいと思っています。

まず、英語力の底上げに向けて、英語教育のガバナンスを確立させました。英語教育の司令塔となる「言語教育研究センター」を設置し、7割を占めていた非常勤講師を減らして、正規の英語教員を増強させました。更に、1年生からネイティブの英語に触れられる機会を設け、日常的に英語の学習を継続できるように、ICT機器を使った自主学習システムも構築しました。

グローバル人材の育成については、アメリカのモンタナ大から英語教育の専任講師を招き、「グローバルプラス・プログラム」を始めました。全学の希望者から受講者を選抜し、1年生後期から少人数でハイレベルな英語授業を展開しています。将来的には、本プログラムの履修生を優先的に海外留学させ、サブリーダーとして修了証を出せるようにしたいと考えています。

グローバル人材育成に向けたもう1つの試みが、2014年度に新設した多文化社会学部です。単に英語が話せるだけでなく、主体的に英語を学び、英語を使って意見を述べ、相手の意見を聞いて発信できる力、そして異文化への共感と幅広い教養を持つ人材を育もうとしています。

教育内容の特色は、英語スキル以外に、専門教育に匹敵する社会科学の教養を習得させる点です。法律、政治、経済、国際関係、歴史、言語学などをカバーする4コースを設け、3年生から分属して専門性を深めます。英語力の育成は、1年生前期から半年間、英語と大学入門科目を集中的に履修する「Transition Program」でレベルアップを図り、後期には3〜4週間の短期留学を必修としています。また、学生10人につき1人の割合で、英語専任の「コーチング・フェロー」を付け、学生個々の学習状況を把握し支援していきます。更に、4コースのうち2コースでは、半年から1年間の中・長期留学を必須としています。

入試も大きく変えました。本学部では、センター試験の英語の配点比率を高くし、前日程の個別学力検査では、時事問題に関する複数の文章やグラフ、地図などを読み解き、それに基づいて論理的に意見を述べられるかを問う試験を課し、思考力・判断力・表現力を見ています。

学部新設から2年が経ち、成果は徐々に表れています。多文化社会学部では、1年生でTOEFL PBT500を目標としていますが、8割以上の学生がその目標を達成しました。1年生で到達が厳しかった学生も、コーチング・フェローの指導を受け、2年生前期には9割が達成しています。更に素晴らしいのは、学生の学習意欲の高さです。大学の様々な活動に意欲的に

参加する学生が多く、グローバルプラス・プログラムでは希望者の半数が本学部の学生でした。

ただ、真の成果が表れるのは卒業後だと、我々は考えています。学生がそれぞれの就職先・進学先で、グローバル人材としてどのように活躍していくかが成否を分ける最大のポイントです。高校や企業から意見を聞きながら、引き続き教育の改善を図っていきます。

一方で課題もあります。初年度は入試倍率が2・3倍になり、多くの優秀な学生が入学しました。ただ、入試内容が難しいことから、西日本の国際系の学部では最高難度の学部位置付けられた影響もあり、2年目は定員割れとなりました。そのため一部では、この学部が失敗だったとする報道もあります。学内にも入試を見直すべきという意見がありますが、私は信念を貫くべきだと考えています。本学が目指すのは、グローバルな視野と突破力を持つて未知の領域にチャレンジしていく人材であり、地域でリーダーシップを発揮し、いざとなれば世界のどこへでも飛んでいける人材の育成です。

高校の先生方には、様々なことに頑張れる伸びしろの大きい生徒を、どんどん地方の大学に送ってほしいと思います。大学は責任を持って生徒の潜在能力を引き出し、産官とも連携して卒業後も支援し続けます。そのような関係が出来れば、地方は活性化し、ひいては日本全体の競争力向上にもつながるのではないのでしょうか。

授業から日常生活に至るまで多文化環境を実現

長崎大 多文化社会学部 学部長 佐久間 正



多文化社会学部の特徴は、「多文化社会」という切り口でグローバル社会にアプローチしていく点です。文化的背景や言語を異にする人々と、パートナーシップやリーダーシップを發揮しながら、様々な形で協働し、共に生活することの出来る人材の育成を主眼としています。そのため、次の3つの力が必要だと考えます。1つめは、広い意味でのコミュニケーション能力です。他者の考えに耳を傾け、論理的に考えて自分の意見や主張を伝える。その上で、国際通用語としての英語力を身に付け、他者とコミュニケーションを取る力です。2つめは、多文化社会を理解するための知識や教養です。グローバル社会には、世界中の地域や人々とつながるといい面だけでなく、極端なナショ

ナリズムやエスノセントリズムといった否定的な側面もあります。そうした困難を乗り越えるために、様々な文化への深い理解が求められます。3つめは、未知の分野に飛び込む勇氣です。グローバル社会ではあえて新しいことや困難なことに挑戦しなければ解決できない課題があるからです。

これらの力を育成するために、1年生前期にTransition Programを設けました。大学での学修に必要な知識・スキルと実践的な英語を集中的に学ぶ科目で、英語力を高めると共に受け身の学びから主体的な学びへの転換を図ります。

英語教育は4年一貫のカリキュラムとし、外部検定試験のスコアを進級の指標にしています。1年生の目標はTOEFL PBTで500、長期留学の要件は550、卒業までに

は600以上を目標にさせています。

早期から海外に出て世界を知ることにも重視しており、1年生後期に3〜4週間、語学研修を主とした短期留学を必修にしました。更に、4コースのうちグローバル社会コースは6か月以上の留学が、オランダ特別コースはオランダ・ライデン大学への1年間の留学が必修です。

15年度には、長崎市の協力を得て、キャンパスの近くに学生寮を設けて、1年生のうちは全寮制としました。1部屋の学生4人のうち1人を留学生にすることで、キャンパスだけでなく生活の場でも異文化体験が出来る環境を整えました。

これまでの長崎大の学生に比べて、本学部の学生はいろいろなことに積極的です。講演会での質疑応答では活発に発言し、学外のイベントにも主体的に参加する姿が頻繁に見られています。今後は18年度をめどに大学院設置を構想しており、理論的探究力やフィールドワークに卓越した人材を育成したいと考えています。

英語力と批判的・論理的思考力の双方を測る新しい入試

長崎大 多文化社会学部 教授 木村直樹

本学部の入試で測ろうとしているのは、基礎的な英語力と、批判的・論理的思考力です。ゼンター試験の配点300点満点のうち200点

は英語で、英語の得点率が前期日程では80%、後期日程では85%以上の者を第1段階選抜の合格者としています。前期日程の個別学力検査で



は、高度な英語試験と、複数の文章やデータを読み解き、それに基づいて論文を書くという批判的・論理的思考力テストを課しています。英語でも、時事的な話題があり、14年度は日本における移民政策の是非、15年度は東京オリンピック誘致の是非を論じさせる問題を課しました。センター試験で9割以上の得点を挙げる受験生でも、個別学力検査の結果により逆転するケースもあります。

また、TOEFLやTOEIC、GTEC for STUDENTS、GTEC CBTなど、本学部が提示する英語の外部検定試験で一定のスコアを持つ受験生は、センター試験の英語の得点を200点満点に換算して第1段階選抜の合格者としています。外部検定試験のスコアを採用する理由は3つあります。

1つめは、受験機会の確保です。入試は一発勝負の側面も強く、実力を発揮できない人もいます。普段から努力している人たちのため

に、受験のチャンスを複数回設けたいと考えました。特に、GTECのような検定料が比較的安い試験を取り入れて受験機会を担保することは、地方国立大の使命だと考えています。2つめは、本学部は留学が必修であり、そこに直結する学習に高校時代から力を入れてほしいという思いがあります。実践的な英語力を身に付けておけば、大学での学びにスムーズに移行できます。3つめは、センター試験では測ることが出来ないライティング力やスピーキング力を評価することです。外部検定試験の活用により、リーディングとリスニングだけでなく、ライティングやスピーキングなどのアウトプット技能もバランスよく評価したいと考えています。

高校の先生方の中には、英語の出来る生徒が本学部合格しやすいと捉えている方もいらっしゃるようですが、英語は、個別学力検査の段階では差が出ません。むしろ、高校の基礎的・基本的な学習内容をしっかり身に付けた上で、それを大学の学びにどのようにつなげて考えられるかが最も重要です。英語がある程度できて、社会に対する関心を持っている、そのような学生が入学後に伸びていきます。

英語を使って何かを考え、表現したいという生徒、世界や社会に対して関心を持ち、様々な角度から物事を捉えられる生徒にとっては、挑戦しがいのある入試であり、入学後も充実した学びが待っているといえるでしょう。

学生が語る多文化社会学部の学び

知識のつながりを楽しむことが学問の醍醐味

多文化社会学部2年

竹田 穰 たけだ・じょう

熊本県立第二高校卒業

中学校時代から英語が好きで、授業以外にもラジオの英語講座を聞き、実践的な英語の習得を心掛けてきました。本学部を志望したのは、英語を使って政治や経済などが学べる点に魅力を感じたからです。また、教員の専門分野が地域・内容共に多様でした。将来の目標が決まっていなかったため、入学時に専門分野を絞らず、幅広く教養を身に付ける中で視野を広げたいと考えました。

入学してからは毎日英語漬けでしたが、そのおかげで実践的な英語力が身に付きました。授業以外にも、様々なテーマの英会話を楽しむプログラム「英語カフェ」に積極的に参加しました。私は高校まで海外を訪れた経験がありませんでしたが、1年生前期だけで、日本語を介在せずに、英語で考え、英語で話す習慣が付き、後期のカナダへの短期留学にも自信を持って臨むことが出来ました。

高校生に伝えたいのは、教科・科目のつながりを意識して学ぶことです。哲学者として知られるデカルトは、平面上座標の概念を確立し、数学の分野にも大きな足跡を残しました。各学問はどこかでつながっていると意識して学べば、今ある知識もつながり、広がっていくのを実感できます。受験勉強では、国語は国語、数学は数学と分けて考えがちですが、学問のつながりを意識することで、大学での学びもより充実したものになると思います。